

作物名：いちじく

病害虫名：株枯病（病原：*Ceratocystis ficicola*）



主幹部の紡錘形病斑



地際部の大型病斑



病斑部の断面

1 被害の特徴と診断のポイント

- ・病徴は、主幹地際部や主枝に不規則で茶褐色～黒褐色の大型の紡錘形の病斑を形成する。
- ・発病初期は病斑を生じた側の上部の枝が日中萎凋し、病斑が拡大して幹周囲を取り巻くようになると樹全体が萎凋し、最終的に枯死する。幼木では、新梢先端の葉が日中萎凋し、これを繰り返すうち次第に下葉から黄変落葉する。
- ・病斑部を切断すると表皮側から幹中心部に向かって褐変部分が進展しているのが確認できる。また、病斑部を 25℃で多湿条件下に 1～2 週間置くと、黒色ひげ状に突出した特徴的な子嚢殻（先端部から淡黄色で粘塊状の子嚢の胞子塊が噴出される）が多数形成される。



病斑部に形成された子嚢殻

2 伝染源及び伝染方法

- ・伝染源は土壌および被害残渣で、主に土壌伝染および苗伝染する。ほ場間での主要な伝染経路は罹病苗（潜在感染苗）の持ち込みによるものである。
- ・土壌伝染ほどではないものの、病斑上に形成された子嚢の胞子や分生胞子による空気伝染や本菌を保菌した数種のキクイムシ類による虫媒伝染も報告されている。

3 発病・伝染好適条件

- ・本菌は糸状菌の一種で子嚢菌類に属し、子嚢の胞子と分生胞子を形成する。菌の生育適温は 20～25℃、子嚢殻の形成適温は 25～30℃である。
- ・発病は地温 25～30℃で多く、35℃以上または 10℃以下では少なくなる。
- ・感染は 6～9 月の生育期に多く、葉の萎凋落葉などの病徴は高温乾燥時に発生しやすい。

4 防除方法

- ・新植または改植の際は、健全な苗木を植え付ける。罹病苗の持ち込みを防止するため、本病発生園地からの穂木の採取や発生園地での苗木生産を行わない。
- ・発病樹は早期に抜根し、ほ場外に持ち出して適切に処分する。
- ・発病樹に対する治療薬剤はないので、予防防除として登録のある薬剤を株元灌注する。

5 その他

- ・宮城県では 2011 年に県南部のいちじく栽培ほ場において初めて発生が確認され、その後、県内広域で発生が確認されている。

6 出典

- (1) 参考文献：ひと目でわかる果樹の病害虫第二巻（日本植物防疫協会）、農業総覧原色病害虫防除診断編 7（農文協）、農業総覧病害虫防除・資材編 7（農文協）
- (2) 写真：宮城県農業・園芸総合研究所、宮城県病害虫防除所撮影